

白川村

〔羅山詩集倭漢十六題雜詠〕阿蘇山火

山有都媛與彦男、阿蘇煙鬱異邦嵐、前王昔自西巡後、火訓肥音是俗談、

〔國花萬葉記肥後十四下〕阿蘇宮

此國にあやしき神池有、此池より日毎のあしに猛煙たのばる事おびたゞし、その立のばる時は、山なり谷こたふるごとくして、常の人あたりへは立よりがたきよしかたれり、此御神は靈驗すぐれてあらたにおはします御事となり。

○按ズルニ、阿蘇山神靈池ノ事ハ、又神祇部阿蘇神社篇ニ在リ、參看スベシ、

〔西遊雜記五〕阿蘇山は、さしもの高山にはあらざれども、古しへよりも燃る山にて、其名世に知る事也、すべて燃る山は硫黃山にして、臭氣甚し、數年燃るは大山にもせよ盡べきに、造物者のなす事にして、盡る事さらになし、かしこき人の癖にして、天地の事にいろくの理を付、理をうがちて大言をいふ事あり、何れを聞ても尤のやうにても、皆々此方より付し理にして、世に云私なるべし、坊中の町より休所の小屋迄、林道六十餘町といふ、休所に至りて見るに、煙りを吹出せる洞數百間餘、眞黒に見へて、けぶりを吹出せる勢ひおそろしげに見ゆる、春秋は絶て強く燃へ、夏少少よはしと云、闇夜に火のひかり有りて、晝は煙り計也、凡四五里の間は煙を見る事也、古人の物語りに、今年より四年以前地動きなりて、烟に交りて灰を吹出ス事おびたゞしく、地上五六寸もつもりて、山の内雷のごとくに鳴ひゞきて、阿蘇郡の村々逃去らんや、いかにせんやと、爰かしこに群集して、日々いかゞせんと人心もなかりしが、さすがにすみなれし家宅を捨て、他方へも行がたく、死なば一所と忙とくらせしうちに、いつとなく山もしづまりし故、安堵のおもひ有しに、牛馬は山近き村々にては、みなく死せしと也、是は灰のふりかゝりし草を喰し故と云、此邊の